

スウィフトの生涯 (Ⅲ)

ウィリアム・テムプルの死から最初の政治パンフレット『アテネとローマにおける抗争と不和について』執筆まで (1699-1701)

三 浦 謙

ウィリアム・テムプル家でのスウィフトの生活は1699年1月のテムプルの死と共に終わった。スウィフトはテムプルの死後、間もなくフェーンハムを発ってロンドンに向った。テムプルの死後、ロムニー伯⁽¹⁾を通じて王の斡旋により聖職に就くことをスウィフトは当てにしたからである。ロムニー伯は名誉革命以前、オランダでウィリアムと交友があり革命を成功させた中軸の一人であるといわれていた。スウィフトは約五ヶ月辛抱強く待ったが、色よい返事はなかった。しびれを切らしたスウィフトはアイルランド総督代理⁽²⁾となったバークレー伯⁽³⁾のチャップレン⁽⁴⁾および臨時秘書として一六九九年六月アイルランドに戻った。だが、ダブリンもロンドンと同じくスウィフトに失望をあたえた。バークレーは牧師であるという理由から、スウィフトを正規の秘書にしないばかりか、若過ぎるという理由でスウィフトをデリー⁽⁵⁾の首任司祭にすることをためらったからである。

デリーの首任司祭クート・オームスビー⁽⁶⁾が1700年1月末他界した時、スウィフトはその後任として自分の名前が挙がるのを心待ちしていた。ところが、5人の候補——トリムの教区牧師ジョン・スターン⁽⁷⁾、ヨークのクライスト・チャーチの副牧師エドワード・シンジ⁽⁸⁾、ララカーの教区牧師ジョン・ボルトン⁽⁹⁾他二名——の中にスウィフトは入っていなかった。若いといってもスウィフトは当時すでに32歳だった。紆余曲折の末、デリーの首任司祭の職はボルトンに落着いた。スウィフトは激しく怒った。

デリーは当時アイルランドで最も富裕な土地柄の一つで豊かな聖職祿を約束されていたからである。経済的な独立を願っていたスウィフトには、これは大きな打撃となったが、不当に無視されて人選から洩れたことがなによりも腹立たしかった。この一件にはバークレーの外に1690年以来デリーの司教で不屈な愛国者としてすでにその名を知られていたウィリアム・キング⁽¹⁰⁾とダブリンのマーシュ大司教⁽¹¹⁾が絡んでいた。彼らは挙ってスウィフトの栄進を妨げた。生真面目な性格のマーシュには1年足らずでキルルートの聖職祿を投げだすような教会人は好ましくなかった。このさいスウィフトにデリーの首任司祭の地位を与えることは慣例に背いた異常な事例になると考えた。したがってマーシュ大司教はキング司教が選んだ前述の五人の候補者から決めることに反対はしなかったのである。

マーシュ大司教、キング司教、スウィフトの3人は国教会への忠誠という点では共通していた。ただ、学者肌のマーシュは世俗的な実務よりは学究生活を好んだ。そして、マーシュもキングも、スウィフトのような文学的な才能はなかったが、逆に、鈍重な勤勉さや持味のない知性といった確実な昇進に必須な条件は2人とも備えていた。スウィフトは到底2人が踏みならした道を歩いてゆける気質ではなかったのである。

スウィフトは結局ララカーの牧師ボルトンの後釜にすわることになった。ララカーというのは基本的には3つの教区の総称である。3つの教区というのは最小のアガー⁽¹²⁾、それよりも少々大きなラスベガン⁽¹³⁾、それに3つの教区の中で最大のララカーである。ララカーは他の2つの教区を合わせた面積の半ばを上廻る広さがあった。3つの教区を合わせた総面積は約10平方マイルで、主に農地であり、スウィフトの年収はほぼ230ポンドになった。かなりの収入である。当時、地方の牧師で年収100ポンドを超える者は6、7名しかいなかった。それに、ボルトンもシンジも一度はララカーの教区牧師を経験していたのである。したがって、デリーの主任司祭の地位にはつげなかったにしても、ララカーの聖職祿をえたことはスウィフトにとって大きな前進であった。

ところで、アガーとララカーは隣接していて、ラスベガンの教区だけが

両者から数マイル隔っていた。しかし、いずれもダブリンから半日以下の行程に位置していた。そして、ララカーの教会はトリムの町から僅か1マイル半南の地点にあった。スウィフトはララカーを愛しララカーの改良に力を注いだ。当初は教区の問題よりも教会の所領に柳や果樹を植えたり堀割や河畔の散歩道を作ったりした。スウィフトはとくに柳を好んだ。教会の周囲に二重に植えたほどである。1713年7月16日付のキング大司教への書簡では柳に囲まれて党争に煩わされることのないと本当にくつろげるといっている。スウィフトが廃屋同然の教会や荒れ放題の教会の土地をどれほど様変わりさせたかは着任後の公式記録に明らかである。記録によると、スウィフトは天井を張り替え板石を敷きつめた立派な教会に仕立て上げた。英国国教会の聖職者が着る袖の広い短い白衣と絨緞がないくらいのものであった。そして教会の墓地は一部は石塀で囲われ一部は溝で仕切られた。

だが、スウィフトはララカーの教区にみずから積極的に奉仕する気はなかった。スウィフトは頻繁にララカーを訪れ、時折、説教もしたが、スウィフト自身はダブリンに居住し、教会の通常の業務は一切牧師補に任せた。それだけに牧師補の選定には気をくばり、牧師補には好給を支払った。ミスという名の牧師補には基本給として年俸57ポンドを与え、臨時の仕事をする時には別に手当を支給した。これは通常の牧師補の2倍以上の俸給だった。

スウィフトのララカーでの説教は教区民にはなかなかの好評だった。日曜日、スウィフトの説教があると欠かさず聴きにくる教区民からスウィフトの従僕はしばしば「スウィフト師の説教今日ありますか」という質問をうけた。スウィフトの説教は今日12残っていて、それぞれどこで行った説教かは判然としないが、ここで、その一つを紹介しよう。「教会で寝ることについて」という説教がある。スウィフトはこの説教の冒頭に使徒行伝第二十章第九節を引用している。「窓辺に腰かけていたユーティカスという若者が熟睡してしまい、パウロの長い説教中ついに目を覚まらず3階のさじきから落ちて死んでしまった」という条りである。だが、引用文中の若

者の身に起きた不測の事故も、この若者の継承者の気持を挫く力はないとスウィフトは観念している。今日の説教者は聴衆を眠らせる技術にかけては聖パウロに優り、奇蹟を働かせる点では遥かにパウロに劣るからだ。

午後の説教は変ることのないお定まりのしきたりに則って行われるので、どんな説教師のことばも一定の距離をおくと画一的な音声にしかきこえない。これほど効果的に睡気を催させるものはない。ギリシャの雄弁術に慣れていた若者ユーティカスが倦きてグッスリ寝込んでしまったのも肯ける。しかし、やはり居眠りは困る。美德と信仰を公然と悪しざまにいう芝居を4時間も観ながら、美德と信仰の弁護をどうして30分聴けないのか。スウィフトはこうやって魂の救済のため神の聖なることばを聴くよう、ひたすら聴衆に訴えている。

話を元に戻す。ララカーに程近いトリムの牧師ジョン・スターンは色黒で美男だが、背が低く未婚だった。彼は会話の機智に長けていた。ダブリンの内外でスウィフトは規則的に彼に会った。ジョン・スターンがダブリンの聖パトリック大聖堂の参事会員になっていたからである。スウィフトもこの地位が欲しかったのだ。そして、望み通り、1700年9月スウィフト自身聖パトリック大聖堂の参事会員の職を得るが、同じ聖パトリック大聖堂の管轄下にあるものの比較的下位におかれているダンラヴィン⁽¹⁴⁾の参事会員職だった。参事会員というのは大聖堂の荘園収益から聖職祿の支給をうける聖堂受祿者をいう。スウィフトはこの後、45年間聖パトリック大聖堂と係りあいをもつことになるが、このダンラヴィンの参事会員職はダブリンのマーシュ大司教の斡旋による。マーシュはスウィフトを重要なデリーの首任司祭にするのには反対だったが、大聖堂の下位の参事会員職をスウィフトに与えることは躊躇しなかったのである。

さて、ララカーの牧師としてスウィフトはミースの司教リチャード・テニスン⁽¹⁵⁾の視察をうけた。テニスンはスウィフトにとって最初の教区となったキルルートに近いカリックファーガス⁽¹⁶⁾で育ち、息子はダブリンのトリニティ・カレッジでスウィフトと同窓だった。それに、彼自身ララカーの牧師も経験していた。ミースはアイルランドで4つの大司教区に次

ぐ高位の司教区であり、テニスン自身、カンタベリー大司教と姻戚関係にあるという有利な条件をそなえていたが、テニスンは元来が地味な人物で、これといっためぼしい仕事はしていない。義務に忠実なだけで、ミースの司教区内の教会領は相変らず乏しく、修復された教会も全体の4分の1に止まった。

10分の1税の徴収には、スウィフトはイサイア・パーヴィソル⁽¹⁷⁾という男を雇ってこれに当らせた。彼は長年この責務を果してスウィフトにつくした。10分の1税は収穫時が納入期限なので、スウィフトにとっての会計年度は11月1日だった。スウィフトの支出は年およそ160ポンドになった。纏った額は牧師補の給料の外、ステラへの手当50ポンドである。その他いくつか支出項目を挙げると、召使いには4ポンド、ダブリンでの部屋代および食事代約10ポンド、旅費数ポンド、馬一頭当り4ポンド、馬の維持費10ポンド、牧師館の管理費16ポンド、衣服費(カツラ・靴を含む)11ポンドである。そして衣服費の約半額を慈善に使った。

スウィフトは当時ミースの司教に、司教の家が出来上がるまでの一定期間、自分の住居を提供したことがある。そのさい友人のシェリダン⁽¹⁸⁾はスウィフト家の次のような所持品目録を作成して司教に渡した。これをみると当時のスウィフトのつましい暮らし向きがわかる。

こわれた櫛の脇掛け椅子

耳のついていないコードゥル⁽¹⁹⁾用のコップ

(コードゥルは薄いかゆにエール、卵、砂糖を加えた飲料)

いたんだトネリコの寝台

継ぎ手のない一組の火ばし

先端がまるくなっている片刃の剣の形をした火かき棒

横にぐるりとヒビの入ったポット、ゴムバンドでしばってあった

鍵がついていない鉄の錠前

古びたカツラ

すり切れて編み紐が半分でているカーテン

パイプのついていないふいご

「オウィディウス⁽²⁰⁾」と「オウィディウス」の古いコンコーダンス

ビン底の木製の鉢、一つには肉を盛り一つには水を入れる
銅製の料理鍋
燭台、かぎタバコ入れ、貯金箱

シェリダンはこのように品目を書き並べてから、「以上の品をお住居が
できあがるまで、只でお貸しします。一時の間に合わせにはなると思いま
す。スウィフト師と同じようにお使ください」と添書きしている。

スウィフトはこのように節儉につとめたが、苦勞の種の一つは会衆が少
いことだった。ラスベガンの教区にはプロテスタントは一人もいなかった
し、アガーの教区も2、3人で全然いないとっていいくらいだった。ラ
ラカーの教区では、教会を囲む裕福な家はプロテスタントだったが、せい
ぜい15、6世帯といったところだった。こういった不利な条件にも拘らず、
スウィフトがララカーに愛着をもつようになった理由の一つはララカーの
教会書記ロジャー・コックス⁽²¹⁾の存在だった。スウィフトはララカーで毎
週水曜と金曜に祈禱書を読んだ。最初の水曜日の祈禱の時、聴衆はロ
ジャー・コックス唯一人だった。ロジャー・コックスは、もともとはキャ
バン⁽²²⁾の帽子屋だが、居酒屋に集まる飲んだくれをドット沸かせるのが好
きといった陽気な男で、どういう訳か本業の帽子屋よりは教会の書記の仕
事を好んだ。だが、教会の書記といっても、いささか型破りで、いつもダ
ブダブの緋色のウエストコートを着こみ、讚美歌を鼻歌まじりに歌っては
教区民を娯ませた。こうしたロジャー・コックスの振舞いは沈みがちな
スウィフトの気持を和ませることになった。

スウィフトはロジャー・コックスから、ララカーの教区牧師ウイルソン
師の話を聞いた。ウイルソンは87歳で他界するまで46年間、義務を忠実
に履行し、だれからもその死を惜しまれた。スウィフトは、その話を聞く
と、ただちにラテン語で“Resurgam”(われ、よみがえらん)という碑銘の
入った墓石をウイルソンの墓地に立てた。

スウィフトは健脚で徒歩旅行を好んだ。初めてララカーへ赴任するさい
もダブリンから徒歩だった。そのさいの扮装は黒服に丈夫な梳毛の靴下、

大きな灰色の外套，前べりの垂れた円いソフト帽，それに履替え用の靴下一足と下着のシャツ一枚をポケットに押しこんでいた。スウィフトはこのさい通り過ぎた町の特色を書き留めているが，ロジャー・コックスの生地キャバンのことは「塵埃（窪地で雨が降ると極端に汚い）」と書きしるしている。だが，ロジャー・コックスは不健康きわまりない生地キャバンで長寿を保ち，90歳という高齢で，最後の息をひきとった。

さて，経済的に自立できるようになると，スウィフトはステラと，ディングレー夫人をアイルランドに呼びよせダブリンに住ませた。アイルランドに呼びよせたのはステラ健康上の理由の外に，アイルランドのほうが暮しやすかったからである。地価は安くて，金利は高く，アイルランドの生活費はイングランドの約半分だった。1701年，スウィフトは34歳，ステラは20歳の美しい魅惑的な女性であった。スウィフトは醜聞にならないように，いろいろと気を配った。まず住居だが，スウィフトが所用でロンドンへ出向いたりして長期間不在にする時などは二人に留守居をさせたりしたが，通常は近くの別の家に住ませて同居はさせなかった。また，ステラとは第三者が同席していなければ決して会おうとはしなかった。第三者とは，ふつうはレベッカ・ディングレーである。スウィフトがこのように意識的に距離を置いたため，ステラとレベッカ・ディングレーがダブリンにきて6年経った後でも，スウィフトのいとこのトーマスはステラとスウィフトの親密の度合を測りかねたといわれている。

1701年2月には，スウィフトはダブリンのトリニティ・カレッジで神学博士の学位をとっている。だが，スウィフトは，このさい手数料および関係者の饗応に年収の5分の1の金を使っている。

さて，このようにスウィフトはララカーの牧師職についたおかげで，経済的な自立ができ，ステラとレベッカ・ディングレーをダブリンに呼びよせ年50ポンドの手当をあたえる余裕も生まれた。それに上述の通り，神学博士の学位もとれたし，ララカーへの愛着も一通りではなかった。だが，それでも，スウィフトはアイルランドに安住できなかつた。アイルランドはスウィフトの鬱勃たる野心を抑えることができなかったのである。そこ

で、ララカーの牧師職にありながら、1701年から1710年にかけて、1701年4月から9月、1702年4月から10月、1703年11月から1704年6月、1707年11月から1709年6月という風に、頻繁にロンドンに出向き長期の滞在をしている。最後の例では実に1年7ヶ月の長きにおよんでいる。

1701年4月アイルランド総督代理としてのバークレーの短い任期は終わった。スウィフトはバークレーに随伴してイングランドに渡った。激動の時期だった。

1697年のライスウィクの和約⁽²³⁾により、イギリスにしばらく平和が訪れてはいたが、ほぼ4年後の1701年再び戦乱が起きた。スペイン継承戦争である。1700年スペイン王チャールズ二世の歿後、嫡子がないため、ルイ十四世の孫がスペインの王位を継承するが、このことはイギリスの軍事力および植民地政策に甚大な影響をおよぼすことになった。フランスとスペインの艦隊が連合すればイギリスの艦隊をゆうに圧倒できるし、フランスがスペインの植民地を併合してイギリスの植民地を包囲することは必至とみられたからである。そこで、ウィリアム三世は1701年ルイ十四世の侵冠を阻止するため、オランダおよびオーストリアと連合して三国同盟を結成し戦闘を開始した。

イギリス国内では、ホイッグ党は対仏戦争に積極的で、トーリー党はどちらかといえば消極的だった。ホイッグ党の主力は都市の商工階層で、彼らは戦争に訴えてフランスのような経済上のライバルを抑え、貿易、植民を通じて市場の拡大を望んだ。これにたいして、田舎のジェントルマンが主力であるトーリー党はウィリアムの対フランス政策でなんら得るところがなかった。戦費がかさんで税金が高くなるくらいのものであった。ところが、1701年ルイ十四世が名誉革命で国外に逃亡したジェームズ二世の子ジェームズ・エドワード⁽²⁴⁾をイギリス王ジェームズ三世として承認したため、トーリー党も対仏戦争に賛成の態度をとることになった。

こうして、対外政策では党派の対立も薄らぎ、一致した姿勢でフランスに向うことができたが、対内的にはウィリアムは苦境に立たされていた。ウィリアムは1688年の名誉革命によって没収したアイルランドの広大な

土地を再度革命前の所有者であった同じオランダ系の寵臣に与えようとした。このアイルランドの土地の復権問題は下院で猛烈な反対に出遭った。ところが、上院はホイッグが優勢で王を擁護した。下院で反対された復権法案は上院を通過したが、その代償は大きかった。トーリーとホイッグは以後ことごとに対立することになる。1700年の春には、ホイッグの中心人物であるソマーズ⁽²⁵⁾が大法官の職を罷免された。12月にはスウィフトのパトロンであるバークレーがアイルランド総督代理を更迭されることが決まり、1701年3月ロチェスター伯⁽²⁶⁾がその後任として赴任した。バークレーのアイルランド総督代理としての任期が短かかったのは以上のような政治的事情による。その後、国会は一段とトーリー色に染まり、1701年2月にはトーリー党の指導者であるロバート・ハーリー⁽²⁷⁾が下院議長に選出された。

トーリー党はソマーズを罷免しただけでは収まらなかった。1701年には、また、スペインの王位継承に絡む分割条約⁽²⁸⁾に加担したかどで、ソマーズ他、オーフォード⁽²⁹⁾、ハリファックス⁽³⁰⁾、ポートランド⁽³¹⁾といった4人のホイッグの有力な政治家を弾劾する動議を出した。

スウィフトがロンドンで最初の政治パンフレット『アテネとローマにおける抗争と不和について⁽³²⁾』を書いたのは、ちょうどこの時期である。彼はホイッグを弁護しながら、巧みな比喩で、両党が識らずに招いている国家の危機をあらためて関係者に認識させた。スウィフトは古代国家の例を引合いに出して有能な政治家を弾劾することは暴虐な専制政治につながることを指摘した。彼はオーフォード、ハリファックス、ソマーズ、ポートランドをそれぞれミルティアデス⁽³³⁾、ペリクレス⁽³⁴⁾、アリスティデス⁽³⁵⁾、フォキオン⁽³⁶⁾になぞらえている。スウィフトの警世のことばが功を奏して、国民はウィリアム三世への忠誠を誓い、同年11月の選挙ではホイッグが大勝して、挙って王を支援することになった。

1688年の名誉革命は王の神権説を否定した。スウィフトがこの論考で説いている勢力均衡論では、国民の権限は王の権限に等しくなる。

この論策の執筆によって、スウィフトはホイッグの指導者と親しく交わ

るようになった。論考は高く評価され、当時の多くの人たちは、ソマーズ
かビショップ・バーネット⁽³⁷⁾がパンフレットの執筆者であると考えた。

注

- (1) Henry Sidney, Earl of Romney (1641–1704), ウィリアム・テムプルの友人。
- (2) 総督が空席か、もしくは不在の時、少くとも2人の総督代理 Lords Justices が任命された。
- (3) Charles Berkeley, 2nd Earl of Berkeley (1649–1710).
- (4) chaplain. 祈禱および説教を通じて、国王他有力者——その家族も含まれる——の教導に当る教戒僧。
- (5) Derry. 北アイルランド北西部の州。
- (6) Coote Ormsby.
- (7) John Stearne.
- (8) Edward Synge, vicar of Christ Church, Cork.
- (9) John Bolton. (6)~(9)生没年不明。
- (10) William King (1650–1720).
- (11) Narcissus Marsh (1638–1713).
- (12) Agher.
- (13) Rathbeggan.
- (14) Dunlavin.
- (15) Richard Tenison, Bishop of Meath. 生没年不明。
- (16) Carrickfergus.
- (17) Isaiah Parvisol. 生没年不明。
- (18) Thomas Sheridan (1687–1738).
スウィフトの友人。劇作家 R. B. Sheridan の祖父。
- (19) caudle.
- (20) Ovid (43 B. C. — A. D. 17).
ローマの詩人。代表作 “Metamorphoses”.
- (21) Roger Cox. 生没年不明。
- (22) Cavan. アイルランド共和国北部 Ulster 地方の一州。
- (23) The Peace of Ryswick. 1697年10月に締結。この和約でルイ十四世はウィリアム三世を英国王として認め、ウィリアムの敵を援助しないことを約定した。
- (24) James Edward (1688–1766).
ルイ十四世と Jacobites (James II 支持者) は Stuart 家の王位継承者として彼

を James III と称したが、Hanover 家支持者からは王の名を僭する者 the Old Pretender といわれた。

(25) John Somers (1651–1716).

(26) Laurence Hyde, Earl of Rochester (1642–1711).

(27) Robert Harley, 1st Earl of Oxford (1661–1724).

(28) The Partition Treaty.

ウィリアム三世とルイ十四世はスペインの王位継承にかかわる紛争をスペイン領の分割によって解消しようとした。この条約により、Bavaria の選帝侯はスペイン、the Indies, オランダを、フランスは the two Sicilies を所領とすることになり、スペイン王はバヴァリアの選帝侯にスペインの王位継承権を与える旨遺書で明らかにした。ところが、その後、バヴァリアの選帝侯が死んだため、更めて、フランス、オランダ、イギリスの間で2回目の分割条約が締結された。そのさい、ルイ十四世が策謀をめぐらせて、スペインをフランスの手中に収めるため、孫の Anjou 侯にスペインの王位を継がせた。

(29) Edward Russell, 1st Earl of Orford (1652–1727).

(30) Charles Montagu, Earl of Halifax (1661–1715).

(31) Hans Willem Bentinck, 1st Earl of Portland (1649–1709).

(32) 正式には、A Discourse of The Contests and Dissentions between The Nobles and The Commons in Athens and Rome; with the Consequences they had upon both those States という。

(33) Miltiades (550?–489 B. C.).

アテネの将軍・政治家。Marathon の戦いでペルシャ軍を撃破。

(34) Pericles (495?–429 B. C.).

将軍・政治家。アテネの全盛時代を築く。

(35) Aristides (530?–468 B. C.).

アテネの将軍・政治家。

(36) Phocion (402?–317 B. C.).

アテネの将軍・政治家。

(37) Gilbert Burnet, Bishop of Salisbny (1643–1715).

主要参考文献

Harold Williams, ed., *The Poems of Jonathan Swift* (Oxford, 1966).

Irvin Ehrenpreis, *Swift* (Methuen, 1983).

John Forster, *The Life of Jonathan Swift* (Folcroft, 1972).

Henry Craik, *The Life of Jonathan Swift* (Burt Franklin, 1969).

Herbert Davis, ed., *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1969).

Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift* (Oxford, 1972).